

あるがままの命の合掌

石村柳三詩集『合掌』刊行に寄せて

佐相 憲一

人がふらりと寺や神社や教会などに行くのはなぜだろう。その宗教に属しているわけでもないのに、古くからの祈りの場に佇むと、寂しいながらも、心が落ち着き、洗われ、同じように苦悩する庶民への共感がわいてきて、そつと祈つたりする。それと同じような場が、石村さんの詩集である。

混沌とした世の中のだ真ん中で石村柳三さんは詩を書いてきた。自らも庶民として人々の間に生きながら、生活感のある対話を哲学問答と結んで、現代における人間の道を見つめてきた。人と人の関係性が希薄に見える閉塞社会にあつて、石村さ

んの詩は人間の体温の光を放つていえると言えよう。人間臭さ。

現代詩に失われがちのこの言葉を、石村さんの詩世界の最高の特長として私は挙げたいのである。

新詩集『合掌』は六つの章から成っている。二十代の頃のものから最近のものまで混在しているが、それが不思議な味わいを醸し出している。

第一章は、優しいひろがり展開する伸びやかな命のうたである。

青森県津軽出身の作者ならではの冒頭三作「津軽りんごの花の詩」「私心《津軽あいや節》」「這ってゆくメロデー」は、甘酸っぱく苦い、青春と人生とふるさとの絶唱だ。そこには、幼なじみの女性とのせつない対話があり、厳しく美しい津軽の自然があり、その中で暮らしの風土があり、

貧しさに負けずに働き生きた人々の痕跡があり、存在の深淵があり、作者の全身からほとぼり出た真実の詩がある。津軽弁の語り、散文形式、リフレイン、と自由闊達にたたみかける内在リズム

には、優しく哀しい声が聴こえるようだ。貧しい農村や苦しい家庭事情などを生きぬくことと、都会に出て必死に乗り越えようとすること。民衆の一人一人の存在はふるさとをめぐって複雑になっていくが、人生経験を経て振り返る懐かしい情景が、詩情を生み出す。

石村さんにはほかにもいい詩がたくさんあるが、この三篇には、それらすべての原点が輝いていると言えよう。世の中の見方も、人間の見方も、人生の感じ方も、おそらくは仏の道さえもが、始まりの津軽体験に強い影響を受けているものと思われる。心にグツとくる詩群だ。

そこからさまざまな野の花、虫、人間のこどもたちなどの命の詩群へ移る。

たんぼぼの微笑

——二人の娘たちへ

おだやかな春の光のあいさつ
匂うばかりの息吹をこめて
わたしの住む古い団地の前の散歩道に
今年もまた

黄色の頭をパツとひらいた
たんぼぼの群れが咲いている

のぶとく明るい

質素な姿を

地表に戯れさせながら

野性の意志の美しさを

自己ふかく表白させながら

わたしの二人の幼い娘の時のことを

そのたんぼぼの明るい群れに
ふわり 甘い蜜をすう蝶のように
団地の若い親子が遊んでいる
のどかな日常の心のカーテンをあけ
すべてを解放させてくれる
天の園のように

ゆらゆら揺れるあわい陽炎のなかに
ひとりの放浪の俳人がやさしくうかぶ
〈ふまれてたんぼぼひらいてたんぼぼ〉^{*}の
あたたかな句心の世界と とも に
心情うるむ春の眸をかさね なが ら

やわらかに放射する光景を
散歩の途次のんびり見つめながら
わたしは

たんぼぼは
愛らしい野性のやさしさで
素朴な裸形の自立精神をつつみながら

こころの陽炎に巻かれていた
去年^{こぞ}こその心景のスクリーンを
ゆらゆら ゆるゆる 解きほぐしてゆく
よちよち歩きの小さなあんよで
たんぼぼの群れを踏みふみ遊んだ

野のもつ孤心の頭花をひらいて
いのちの美しさを叫ぼうとして
一心に咲いて
無心に生き

再生をひめ滅びようとす
たんぼぼのこころをほのかに耳にして
わたしはゆつくり蹲り
足元のたんぼぼの頭をそと撫でてやる
この四月から中学生になった長女
小学三年生になった二女の
二人の成長の頭を撫でるように

ねばつく愛の息吹の微笑をつくれ
のどかなたんぼぼの群れの昼下り
日常のひとつきを太陽の下で呼応し
ああ ひとり言の柔和な共鳴をはなち
ふま れ て たんぼぼ
ひら い て たんぼぼ

そしてこころひらいて想う
自己主張をする娘たちよ

*種田山頭火の句。私の愛唱句の一つ。
『定本 種田山頭火句集』大山澄太編

「野性の慈しむ花のようにすすくすくのびれ」
「地表にのぶとく咲くたんぼぼの如く育て」
「地表にのぶとく天然の相性を讃え
からみあう天然の相性を讃え
たんぼぼと大地の土壤の絆
親と子の反目しつつ育む血脈の絆
のぶとく のぶとく 思いやる
やさしさの意志の微笑をつくれ

団地のささやかな暮らし。たんぼぼの愛らしい
姿に伸びやかな我が子の姿を重ねて想う父親。つ
いさつきまでよちよち歩きだった二人の娘が反抗
期の気配も感じさせるほどに成長している。団地
のたんぼぼに父と娘のアルバムが揺れて見えるの

(彌生書房刊)より引用。

だ。そして、可憐でたくましい野の花から、放浪の俳人・山頭火の俳句を織り交せて、作者の詩想は命の成長の哲学へと深まっていく。時に親に反発する子のその反発さえも肯定し、父親は自然界の愛の中に娘たちの歩みへの願いをこめる。さわやかでありながら、命の關係性を哲学的に掘り下げた、深い作品である。

そんな作者は作品「骨片の雪」の中で、ヘニソンの遺した最深の芸術は／（中略）／死者のすべてを凝縮した《お骨》であろう」と書いている。骨というものはその人間が精いっぱい生きて死んだ歳月のすべてが凝縮されたものであり、ひっそりとあるその遺骨は《最深の芸術》なのだ。ここに、この詩人の人間を見る眼の温かみがあり、名もない無数の庶民の人生へのいとおしみと共感がある。その認識自体が紛れもない「詩」である。

第二章は、仏の道の認識が作者独自の命のメッセージとなつて発せられる詩群である。「あの世」へ急ぐ若者たちへ、作者は悲しみいっぱい視線で自死を思いとどまらせてほしいと願う。その考察には死と生を背中合わせの一体のものとして捉える視点がある。これは、自ら重病を乗り越えてここまで生きてきた作者が死というものをリアルに凝視してきたことによるものであろう。

千葉大空襲や東日本大震災を題材とした作品も収録されている。日常生活の中に常に生と死を見つめる作者が、大量の命が台無しにされる戦争の事実などから目を逸らさないのは当然と言えよう。慈悲というものを、混沌とした実社会で自ら苦悩し悲しみを経て来たところからにじみでできたものとして展開しているところに、石村さんの仏の心の詩があろう。メッセージは痛切である。

第三章は、やはり仏教体験や人生体験から出た詩群だが、二章の多くがストリートなメッセージ詩のスタイルをとっているのに対して、三章は認識をイメージ世界の言葉で展開していく詩のスタイルをとったものが多い。ここに来て読者は、この

詩人がさまざまな文学手法を駆使する人であることを実感するだろう。実験的な作品も見られ、喩や象徴の詩が好きな向きにはこの三章は特別の魅力を感じるだろう。

石村さんには風刺の才能もあって、風刺詩の数こそ少ないが、キラリと光るものを発表してきた。前詩集『夢幻空華』に収録されている「てんぷら」などはその代表作と思う。風刺と言っても、そこには石村さんらしい大衆性があつて、社会の暗黒を鋭く斬りながら、読後感には難解に閉じられておらず、その民衆芸能的な味わいは、旅芸人の

すぐれた紙芝居か何かを見た時の民衆の痛快さに似たものと言えるかもしれない。権力を見る彼の目はシビアである。

舌にイ

お前さんの舌はどんな舌だい。雄弁舌か、毒舌か、御用舌か、広長舌か。はたまた真赤なエゴの嘘舌か。嘘舌なら子供のころよく聞いた閻魔様に、舌を抜かれよ。そう信じた閻魔様の言葉だが、バブル崩壊のこの世には閻魔王の舌を抜く話も泡と消えてしまふぞよ。舌とは本来、人間の味覚を認識する大切な器官なのに、その物を噛んで味わうことよりも、この世は仏のもつ広長舌を利用して人びとを誑し、その舌で、大衆のこころを知らぬ間にペロリと味食満腹し、利権を懐にしようとする魍魎魍魎族の舌

が、うようよ泡沫よろしく濶歩している。蝙蝠人間の正体不明の顔して。

そのグロテスクな象徴としての舌の持ち主が、魍魎魍魎町の国会という城にたむろする変化先生サマ。否、利権政治屋に成り下がった議員サマたちだ。彼等は口先で選挙民に雄弁をのべ国会城に登院するが、やっていることは大衆不在の蝙蝠芝居。大衆を馬鹿にした「拝金」さまさまのエゴ利権の仕事だけ。そこには民主主義も、良識も、倫理も糞も味噌も押しつけられてありやしない。「舌にイ、舌にイ」の利権政治屋の舌がまかり通り、拝金大臣ボストの椅子ばかりに眼をむけ、八九三顏敗けの駆け引きをし、脅しと利権のために闇の真黒い舌をのばす。そのため世はマヒした変化舌によって破壊され、舌はマヒした感情の闇世をこのときぞとばかり乱舞する。

宇宙と地球、自然界・生物界と人間内面世界、それらを網羅する、いわば曼荼羅的なスケールの存在凝視でもあろう。

物体を語りながら心が描かれている。

石村さんは世界のさまざまな思想に学ぶことで仏教をいったん相対化し、そこからあらためて真の仏の心を探り、他方で人生のさまざまな経験と歴史社会での他者との触れあいを経て、詩の中でそれらを総合している。

しかし、仏教から出発した思想であっても、これはもう石村さん自身の詩想であって、読者が何教の信者であれ、無宗教であれ、ここに展開された万物と人間の生き方の追究は親しく心に入ってくるであろう。

感動的なことは、〈あるがまま〉という言葉が石村さんの詩世界にあっては受動的な諦念などとは全く逆に、恋をしてときめいたり、積極的に世

ああ利権政治屋の闇世の舌には、舌にとつて一番大切な味覚作用がズタズタにされ、その不味覚の舌が蔓延している。何と気味が悪い利権族の舌の臭さ。このままでは日本国そのものが腐敗してしまうかも。そこで起死回生の秘話を一言。何事にもとことん厳しく批判をし、猛省を反芻する牛たちの食味の牛舌こそ、利権屋を噛みくだく猛舌の養分。モウー、モウーの「牛の舌」の思想こそ、この世の防腐剤。人間よ大衆軽視の舌に怒れ！

第四章は、石村さんの詩想の集大成とも言える「石の思想」の詩群である。この詩集のハイライトと言えよう。

長い歳月を裸の姿で自然界に存在し続ける石。沈黙していながら、何かを語ってもいる石。森羅万象の象徴でもあり、人間思念の比喩でもある。

界の人々と平和連帯したり、悲しみを共有して励ましたり、そういった方向の人間本来の伸びやかな〈あるがまま〉に寄り添っていることだ。

なるほど石は国家対立をしない。戦争をしない。差別したりいじめたりしない。欲で自他を苦しめない。石は頑固に地球に存在する。石はすべての目撃者である。

あこがれの形、と言ってもいいかもしれない。本当の優しさが生む強さ、と言ってもいいかもしれない。孤独と向き合い世界に開いているあり方、と言ってもいいかもしれない。

風光の自然石

秋天のもみじうむ山道の静寂のふかさは、はるかなる彼方のやや大きな姿をもつ自然石

時空を悠々とめぐり 呑込んでしまふ
風雪風光の石となつてどっしりと黙座して

この山道を十数年ぶりに歩く私に

世の転化への意思と変わらぬ風景石の姿で

踏むおち葉の私に過ぎ去つた心の音を放散し
散るかれ葉の彼方からのやすらぎを伝心

そこにこそ風光つよかつつんだ自然石が

黙する無心を閉じこめ四季風景の魂をうむ

北辺の小さな山道の人びとの匂いの風土の影
出自の匂いを消してはならぬ風光石として

独りおち葉を踏む男はゆっくりと歩きながら
風土ふるさとのはなつ黙語無心のあたたかさを聴く

風と光のにじんだ命の郷愁は内在通底した
風景からの人生を背負っているものだ

寂しさを悲しむこともなく座す自然石の姿

ただ風光の慈愛につつまれた素直さの無心よ

はるかなる本然として流れている風土の面影
やさしく思郷し呼応する私の内在の自然石に

第五章「初期詩篇」は、若い頃に詩誌に発表したまま詩集には未収録だった作品群である。おそらくこの詩集を読む大きな楽しみの一つがここにもあるだろう。この詩人が初期の頃から人間存在の探究だけでなく、詩文学のさまざまな吸収と新鮮な表現実践を怠らなかつたことがうかがえて、ひたむきなその詩心に共感する読者も少なくない

だろう。実存的な深淵凝視や若者の孤独感などは、二十一世紀の現代の若者の心にも通じるものがある。

第六章は「短歌」である。作者の文学活動のうちひとつの形だ。

こうして、激動の世を生きてきた人間・石村柳三さんの詩の心は、〈合掌〉する。

〈合掌〉はてのひらとてのひらの／宇宙のひとつの 美／山河大地をつつみ／ひとびとをつつみ／〈願ねがの空うらの空〉

(『合掌』そのⅡ)より)

ぬくもりに灯るもの、ひろがっていくもの、実感されるもの。それは自分と他者の真のつながり

であり、人間と自然の命の結びつきであり、内面と宇宙の一体化である。

石村柳三さんというと、石橋湛山研究者として著名であり、批評家としても定評がある。

しかし、それらの独自の光はすべて、彼が詩人であるところから放たれていると言えるだろう。

北津軽出身の詩人は素朴かつ繊細である。自然界の声を敏感におのれの中に聴き、人間のありようを内部から見つめて、言葉に記す。

その言葉は、詩人独自の仏の心に満ちていて、とても親しく人間臭い。

新詩集『合掌』が、殺伐とした現代社会に生きる多くの人々に読まれることを願う。

あるがままの命の合掌が、ここにあるから。

石村柳三詩集 『合掌』 栞解説文

佐相憲一

コールスツク社

2011